

---

# ロボット製作者の誤算

うりぼう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロボット製作者の誤算

### 【Nコード】

N3227Z

### 【作者名】

うりぼう

### 【あらすじ】

ロボでないロボットもの。

中編予定です。

## 1 最終面接

最終面接官、これが今日、桜井さくらいに与えられた任務である。

自分の作品に乗るパイロットを決めるそれは、技術者たる桜井にとつても重要なことであった。

徹夜明け、カフェイン漬けの頭を揺り起こし、並べられた椅子に座る。

端末の画面には面接者のプロフィールが入っている。どれも、いかつい称号のついた猛者もさたちばかりだ。

人型軍事兵器のパイロットなるものの応募であれば、そんなものだろう。

西暦が二十二世紀になったころ、困ったことに侵略者というものがあらわれた。

よくある話で、宇宙からやってきた未知の生命体というやつである。侵略者せりやくしやというのは、正確にはどうであろうか。

少なくとも、桜井が思う人類とは思えないものが襲い掛かってきたわけで、まるで二十世紀末に流行したロボットアニメの敵キャラのような生き物だった。

世界中で十八体、それぞれ人口密度の極端に高い地域を狙い、降りてきた。

その中に、日本も含まれる。

富士の樹海に降り立ち、一発の砲撃を首都に向かって放った。

その日から、数百年ぶりに首都は京都に戻ることとなった。

残念なことに、人類の危機に救世主といわれるものは現れなかった。謎の正義の味方も、宇宙警察も、政府が隠匿してきた秘密機関もなかった。

唯一にして最大の救いとしては、敵が斥候部隊であり、最初の襲撃をのぞき、人類に戦闘をけしかけることはなかったということだ。なにをするわけでもなく、ただ、そこにいる。人類をひたすら監視しているようだ。

それから二十数年、世界中の紛争が終わりをづけ、かわりに地球軍になるともわかりやすい名称の軍事組織ができあがった。

しかしながら、元々、仲良しというわけでない国々も交えた軍勢である。一枚岩というわけではない。

最初の数年であらゆる攻撃をしかけたが、侵略者どもにはほとんどダメージを与えられず、むしろ返り討ちにあつた。核を使った国もだが、無駄に地球を汚染しただけでなく、侵略者が妙な形に進化していったのを見て、周りは後に続くことはなかった。

なので、地球軍は少なくとも二つの岩に分かれている。手出しをしなければ、とりあえず問題はないだろうというハト派。いや、いつ攻撃してくるかわかならない、さっさと倒してしまえというタカ派。

桜井の所属するのは、どちらかといえばタカ派に属する。人型軍事兵器、すなわちロボットを開発するチームなのだから。

タカ派の国々は、それぞれ新しい兵器を作ることに余念がない。そのなかで、平和ボケした国が、ロボットを作って侵略者を倒すぞ、というのだから、笑いものになったことはいうまでもない。

まあ、そういうお国柄なので仕方ない。

しかし、周りの反応に対し、桜井の組する開発チームは至極真面目に取り組んでいた。桜井もまたそのひとりである。

彼らは皆、ひとつの情念に突き動かされていた。

明確な目的を持つ人間ほど、強い生き物はいない。

彼らが望むのは、人類の平和ではなかった。

彼らが望むのは、死んだ人間の復讐ではなかった。

あるのは、税金で巨大ロボットが作れるという、ただそれだけだった。

天才科学者の集まり、聞こえはいいようだが、つまりは趣味を極めたロボオタ集団である。

ほぼ完成したロボット、それに乗るパイロット、それもまた、桜井にとって重要な要素である。

自分の作品に乗るのだから、やはりそれにふさわしい役者が必要だ。研究室にこもりきりの男が、こうして面接官となっているのもその理由だ。

ロボットにふさわしいパイロットを、ただそれだけだ。

難しいといわれる桜井の思考だが、根幹は実に単純だったりする。

面接者が二十人をこえたところで、桜井は明らかに落胆の色をのせていた。椅子の上に体操座りになり、くるくると回る。

周りの人間は何も言わない、そういう人間だと理解している。

ただ、助手の里中さとなか女史だけは、あわあわとこちらを見てはやめてくださいと口をぱくぱくさせている。

わかっていると、姿勢を戻すと次の面接者が現れた。

桜井の顔がみるみると変わる。

今までの面接者とは違う、なんというかオーラ、纏う空気が違うのだ。

入ってきたのは、赤い髪をつんつんに立てた十代の若者だった。

髪の毛のはねとセットに、力強い眉が意思の強さを示している。元氣と勇気を無駄に秘めた力強い目に、屈託のない笑みを浮かべる口、やんちゃをそのまま表したかのように、頬には絆創膏を貼っていた。

まだ高等教育の過程だろう、他の面接者がスーツであるのに対し、学生服を着ている。

対象年齢を十八歳からにしているので、学生が来ても問題はないはずだ。しかし、来るのは大体二十代後半から。せつかく、制限年齢を三十歳までにしているのに、どれもこれも無駄に堅くて老けた野郎ばかりだった。

まあ、若いものも受けていたのかもしれないが、最終面接までに落とされたのだろう。

しかし、若者は他の面接者の格式ばった堅い口調でなく、どこか間違った敬語を使う。その中に、夢や希望といった現代の若者にかけた熱い情念がうかがえる。

制服の裾から出た手足には、無数の傷が見えていた。修行の結果です、と至極真面目に言ってくれる愛すべき馬鹿だ。馬鹿なのに、ここまで残ってこれたということは、身体能力、筆記ともに悪くないはずだ。素敵な馬鹿だ。

桜井は端末のプロフィールにチェックを入れる。

あまりに理想、絵に描いたようなロボット操縦者だ。

桜井の眼鏡の奥の熱い思いは、レンズをこえて他のものにも見えたりらしい。

面接を終えた後で、同じ技術者の澤田さわたがやりと笑う。カレーが似合いそうなふくよかな中年は、こう見えて人工筋肉の権威である。

「やったな。ようやく、気に入りそうなのが来て」

「ああ。ただ、気になることがひとつある」

なにが気に食わないんだ、と澤田が首を傾げる。

素養としては問題ないのだが、たった一つだけどうしようもないところが気になるわけで。

「……てくれないかな」

聞き取りづらい言葉を澤田は耳を近づけて、聞き取るうとする。

反すつするように桜井がもう一度つぶやいた言葉に、澤田は身を引

いた。

「性転換してくれないかな」

パイロットとして素晴らしい素養を持つ若者、その胸部は平均のそれより肥大し、制服の裾からのぞく大腿は、見るものによつては垂涎ぜんの代物である。

『飯田睦美』、十八歳。

染色体はホモ型。つまり、女性である。

## 2 誤算

ロボットを作るといっても、理想と同じものを作ることなどできない。

その点、桜井も重々承知している。

まず、気になったのは駆動式についてだ。

ロボはロボらしく、機械的であつてこそ美德である。その昔、自動車や列車が変形し、ロボットになるという代物があつたのだが、それを踏まえるとカルダン駆動方式が理想的だと桜井は思う。

だが、採用されたのは澤田のすすめた人工筋肉だった。

すでにパワースーツや小型ロボットで使われているそれが採用されるのは、理性としては納得できる。

カルダン駆動方式だと、やはり機械的になりすぎる点も否めない。理性としてはわかつている。

8

同志と思われがちな桜井と澤田であるが、実は一線を引くところがある。

桜井は二十世紀後半におけるより機械的なロボット、澤田はそのあとに生まれた生物的フォルムを有したロボットを愛している。

同じロボオタといっても引けないところだ。

それでは合体できないじゃないか、といえば、カルダン駆動方式もかわらんだろ、といわれた。

工夫すればできないこともないのだろうが、せいぜい接続箇所が数か所である。二体までなら合体可能だが、三体目ともなると難しい。

インフレのごとく強くなるロボット、それは泡と消える。

もちろん、合体の件は、議会で却下になるだろうが、だからとて夢は最後まであきらめるものではない。

人工筋肉が採用されたことで調子にのった澤田は、ロボットの外装もまた生物的にしようともくろんでいたが、それは許されなかった。いい気味である。

外装は重金属、それは譲れない。

と、言いたいところだが、ここにも待ったがかかる。

重金属は重い。

燃費が悪く、関節や人工筋線維ナノチューブの摩耗が激しくなるという。

では、代替になにを使う気だ、と詰め寄ったところ渡されたのは、軽くて堅いおなじみのものだった。

プラスチックである。

いや、正確には可塑性物質というわけではなく、大義の意味でのプラスチック。ここでは、植物由来の高分子物質とっておく。

材料はとうもろこしである。

エコである。土に戻せば数か月で分解されるそうだ。

また、耐熱性、耐水性にすぐれ、メンテナンスさえ行えば、金属よりもかなり使い勝手のよい素材らしい。

家畜のえさでロボを作る気か、ロボにエコを求めるな、とお偉いさんに殴りかかりそうになるのを、助手の里中さとなかにはがいじめにされる。

ああ、丁寧に説明をくわえると、桜井は女性ひとりに取り押さえられるほどのもやしである。

あまりの桜井の暴れっぷりに、お偉いさんは「わかった、どうにかしよう」といってその場は事なきを得たが、のちに材料がとうもろこしから米に変わるだけだった。

だからなんだというのだ。

ちなみに、国産にこだわる別の技術者が、使用される米に外国産が混じっていたことに腹をたて、原材料は国産ひとめぼれ百パーセントになったというのはどうでもいい話である。

なんでそこは受け入れられるんだ。

装甲に使われる素材は、やたら長い横文字だったが、原材料と形状から『せんべい』としか誰も呼ばない。

ああ、せんべいだ。他になんとという。

他にも、ロケットパンチは却下され、大きさもスーパーロボットではなくリアルロボットサイズ。外装のデザインは赤と金を基調としたかったのに、樹海に行くのに派手すぎると、迷彩色。地味すぎる。

そんなわけで、桜井の意見が真つ当に通ったのは、ロボットを遠隔操作式でなくパイロット式にしたことくらいだ。

つくくわえていうならば、三十歳未満という年齢制限付き。本当ならば、二十歳以下としたかったが、贅沢は言えない。

桜井の担当は、ロボットの操作系にあたる。

人間のようには二足歩行を行うというのは、簡単なようで高度な行為

だ。すでに二足歩行型の小型ロボットは一世紀以上昔に作られていたが、それをより大型化し、より人間的に動かすのは課題が残るものであった。

桜井は脳波とロボ操作を直結する方式をとった。正直、気に食わない方式であるが、より確実にロボ作りに取り組むには仕方ないことだった。あとで、形だけのコックピットを作り上げればいいことがあるし。

しかし、これの原型となるシステムを作ったのは、桜井の祖父であり、そのブラックボックス部分を知っているのは桜井ひとりのみであることが役に立つ。

「これはより感受性豊かな、つまり多感な若者ほど大きく作用するシステムだ」

と、でつちあげた。

理由は、ロボにおっさんが乗ってもおもしろくない。それだけだ。いや、おっさんが悪いとは言わない。むしろ、好敵手には必要な素材である。しかし、主人公格の機体にのるのは、無駄に熱血した青少年であるべきだという持論がある。これは譲れない。

というわけで、ロボ自体が気に入らない仕上がりにできたところで、一縷の望みをかけて最終面接を行ったわけだったが。

飯田睦実<sup>いいただむつみ</sup>。

あまりに理想的過ぎて、たったひとつのことが許せない。そういうこともある。

「俺のY染色体なら、いくらでもあげるのに」  
「な、なんですか。セクハラですよ」

隣でココアを飲む里中女史が、なにか勘違いしている。  
そういう意味ではない。

いや、そういう意味ではないので、髪を指に巻きながらもじもじしないでほしい。上目使いでこちらを見るな。

顔を赤らめる天然女を無視し、桜井は飲み終えた紙コップを再生マ  
ークの入ったごみ箱に捨てる。

面接の結果、採用者は十名。

これから一年間、正規パイロットになるための訓練を受ける。

その中に飯田睦実も含まれる。含ませた。ああ、ごり押しだ。  
桜井の推した人物は、飯田を含めて三人しかいなかったので簡単に  
ことはすんだ。

ちなみに、残りふたりは、クールな長髪美形タイプとややずんぐり  
した三枚目タイプである。二号機、三号機も視野にいれなければな  
らない。

高等学校の卒業と合わせて、こちらの研究所に配属になる。

それまでに桜井のすることは。

ネットで美容整形外科を探すことだった。

タイやモロッコへ行く必要など、前世紀の話で、今は国内でもけっこう安価にやってくれる。もちろん、費用をけちるつもりはないし、変なところを紹介するつもりもない。

知り合いの外科医に話を聞いてみるのもいいかもしれない。

大切なパイロットである、無下にしたくない。

### 3 操作

三月になり、パイロット候補生たちが研究所にやってきた。基本、研究所内に隣接する寮に住むことになる。

独身の研究員は同じく寮に住むものが多い。

桜井さくらいも独身者のひとりだが、通勤圏内に持家があるためそこに住んでいる。

もつとも、徹夜で仕事をすることも多いので、研究室内に簡易ベッドと着替えを置いているが。

候補生たちが入ってきたことで、ここ最近はずっと研究所で寝泊りが続いていた。

二週間ぶりに家に帰ると、たおやかな笑顔で祖母が迎えてくれた。

「おかえりなさい」

「ただいま」

身内びいきといわれるだろうが、理想的な年齢のとりかたをしていると、桜井は思う。

現代では珍しい平屋の日本家屋に、竹ぼうきで玄関を掃く和服の老婆。

そこだけ、二十世紀半ばにタイムスリップしたかのような光景である。

これも祖父の残した特許の恩恵による。でなければ、箱物マシヨウに住む人口が九割をこえるこの時代で、小さいながらも庭を持つことなどできない。

脳波を読み取り、直接、端末に働きかけるシステムは、現在さまざま

まな分野に利用されている。

特許期間はとうに終えたが、祖母の生きているあいだくらいは、固定資産税を払うことはできる。

両親はさっさと売ってしまったって自分たちのマンションに移り住んで来いというがそれはありえない。

祖父が死ぬ前に遺言書で書いてくれた。所有権は桜井にうつっている。

「荷物、届いていたから置いといたからね」

荷物はロボット模型に囲まれた中に置いてあった。いうまでもなく、桜井の部屋であり、大量の模型は祖父から受け継いだものも多い。祖父がこの家をくれたのも、コレクションを守るためだということがわかる。

箱の中身は、桜井が先日ネットで注文していたものだ。

仮想空間を使えば、研究所内でもいくらでも買える。脳に情報をフィードバックすることで、試着や試食も可能である。

「どつやって、渡そうか」

腕を組んで、考えあぐねていると。味噌汁のおいがした。祖母のことだ、ほうれん草のおひたしと、肉じゃがも急いで作っていることだろう。

軍用レーションとタブレット以外の食事は久しぶりだ。

研究所に戻ると、朝から候補生たちがランニングを行っていた。

操作系が脳波を読み取り、動きを再現する以上、候補生に必要なのは運動能力である。

瞬発力も持久力もどちらも欠かせない。

無駄に元気なのは、やはり飯田睦実いいたむつみだった。

暑苦しいくらい熱血、いいことである。

でも、無駄に揺れる胸部は邪魔だ、わるいことである。

研究室にはいると、天然助手がコーヒーを床にぶちまけていた。

いつものことなので、無視して椅子に座る。

酸っぱくてどろどろのコーヒーをだすくらいなら、自販機のもので十分なのに、古めかしいサイフォンを使っていつもいれてくれる。

残すと実に情けない顔を向けてくるので、ちびちびと飲むしかない。ここで一気に飲んだほうがましだと思うが、無駄に気を利かせておかわりをいれてくれるので、タイミングを計りながら飲んでいくしかない。

泥のような感触が口に広がる。

実に面倒くさい助手だ。

しかし、資料整理だけは上手く、机の上にはきれいに閉じられた資料がおいてある。

紙にプリントアウトせずとも、端末で見ればすむことだが、桜井は

レトロな方式を好む傾向にある。

ここ二週間、候補生たちにはロボの操作系の端末をいじってもらった。グラフの波線はそのシンク口率を示している。

でっちあげで「多感な若者ほど大きく作用するシステム」といったが、すべてが嘘というわけではない。

脳波というのはひとつによってまちまちであり、より反応の大きいものほど操作が円滑に行われる。

パイロットの資質としてあげるなら、身体能力とともに操作系との相性も含まれる。

しかし、これはある意味諸刃の剣で、相性のよいものほどパニック状態になると取り返しがつかないこともおこりかねない。

なので、そのバランスを考えて誰がもっともふさわしいパイロットであるか決める必要がある。

もっとも、それはシステムに恒常性を持たせることによって、あらかじめ防げる仕様になっているが。

あるページで、桜井は指をとめる。眉間にしわをよせる。

「おかしいなあ」

「なにがです？」

「いや、聞いてないから」

頬を膨らませて怒るには少々痛い年齢の助手を無視する。片手に持ったコーヒーマグは、桜井のマグが空になるのを待っている。

飯田の資料だ。グラフの波線は、それほど大きな波をうっていない。平均のそれ以下だ。  
ゆえに、シンクロ率も低い。

あれだけ、無駄に元気に端末をいじっていたのに。

いじるといっても、操作系端末のついたゴーグルを使い、動きをイメージするだけである。イメージは仮想空間内のアバターに反映される。その動きの誤差が、反応の大きさの違いと比例する訳だ。

桜井の買い物も、アバターを使ったものだ。ほとんど、現実の買い物と変わらない代物だ。

飯田ならば、他の候補生に比べて反応速度がはやいと予想していたのに。

どういふことだ。

男女の性差を視野にいれても、反応は悪いとさえいえる。

桜井は、首をかしげたまま、泥のようなコーヒーをすすった。

「おい、おまえか」

スナック菓子をほおばりながら、澤田さわだが話しかけてくる。

「なんのことだ」

桜井は、メンソールをふかしながら答える。

有害物資のまったく含まれなくなった煙草は、それでも分煙の義務がかせられる。ガラス張りの喫煙室のベンチにけだるげに座っていた。

「あれだよ、あれ」

太い指のさす方向には、ランニングを終えた候補生たちがいる。その中に紅一点の飯田がいるのだが。

「なんで平べったいんだよ」

無駄な脂肪がついていた飯田の胸部が、とてもすっきりしていた。かわりに腹回りがかっしりしたように思える。

「ああ。強化ギブスだ」

「はあ？」

飯田は実に真面目で素直な熱血馬鹿である。性差を補うために、訓練は他人の倍しなければならぬと言ひ含め、重石の入ったベストを渡した。

実際は、胸部をおさえこむ特殊なベストである。胸の大きさを考慮すると、すべて押さえこむことはできず、かわりに腹部を太くすることでごまかした。そこに、重りをいれるように特注した。

わざわざ女性型アバターまで作って買ってきた代物だ。いかに、ラ

インを隠して見せるか、試着に三時間もかけたのだ。  
ネカマをやっている最中に、里中さとなかがやってこないかどきどきしたものである。

「揺れて邪魔だと思ったからな」

「おまえはー」

澤田がこぶしを震わせる。実は、こいつも、とある特殊趣味の店で某パイロットの着るタイトなスーツを注文していたりしていた。

どんな言葉で着せようと考えていたか知らないが、おそらく澤田もネカマをやって試着していたりしていたのかもしれない。

いい気味だ。

ヒーローはスーツなど着なくとも、赤いマフラーさえつけていればよい。スカーフでも可。学ランなら着ても悪くない。

平べったい体型の飯田にはよく似合うことだろう。

それにしても。

もう一度、脳波を調べてみる必要があるかな。

メンソールを灰皿につぶしいれると、桜井はぼさぼさの頭をかいた。

#### 4 恩恵

ロボ研の食堂はまずい。  
とてもまずい。

カレーはスープのようであり、ラーメンにはチャーシューではなくハムがのる。

学生時代の学食のそれよりも悪い。

冷凍ものを解凍しただけの食事がなぜあんなにまずいのか不思議でならない。カレーは一晩煮込めといたい。

なんでも自動化するのは勝手だが、最低限のレベルは保ってもらいたい。  
オートメーション

なので、桜井はいつも自販機で売ってあるレーションとサプリで食事を済ませます。味気ないが、まずいというほどでもない。

隣に座る里中は、泥のようなコーヒーを入れる味覚の持ち主なので半熟なのか生焼けなのかわからないオムライスをおいしそうに頬張っている。

澤田は水っぽいカレーをさしておいしくもなさそうに食べる。

澤田とは仲が良いとも悪いともいえないが、一緒にいることが多い。つまり、互いに友人が少ないということだ。助手はいつも一緒にいるからどうでもいい。

「おまえ、貧乳好きだろ」

「なぜそうなる」

澤田がスプーンで桜井をさす。

「ってか巨乳嫌いだろ」

「それは、肯定する」

以前、付き合っていた女性がそれだった。

変わり者の桜井も、それなりに若かったわけで、向こうから近づいてきたら悪い気はしない。

若かったのだ。

それでもって、家に呼ぶようになったころ、

「勝手にネット口座から金引き落としてるのを発見した」

桜井の祖父が亡くなってまもなくのころだ。

どつりで端末をいじっているときに、やたらくつついてみると思った。実家のパソコンということもあって、セキュリティは甘かったのだ。

別に祖父のことを話したことはなかった。知っていて近づいてきたのだろう。

「なんでお金がないの、って逆切れして出て行った」

その際、飾られた模型を投げつけられた。物の価値がわかっていないようで、祖父の残した遺産は古い日本家屋と大量のプラモだった。壊したものが、今は生産中止で数百万の値打ちがついているとは思ってなかっただろう。祖父は、趣味に金をかけるひとだった。

自分だけの被害であれば何もする気はなかったが、祖母の大切にしていた指輪が盗まれたと知ったら被害届を出さないわけにはいかなかった。

あとから聞いた話によると、前科があり、執行猶予中だったらしいわゆる地雷を踏んでいた。

哀れな目が二組、こちらを見ている。

「あの、私、六十五のBですから」

「ああ、聞いてないから」

里中女史の言葉をスルーし、レーションに入っているクラッカーを頬張る。

里中は里中で、別の地雷にみえる。

おかげで女性関係など、面倒なことに興味が持てず、思う存分趣味に走って生きることができるようになった。  
ある意味幸運かもしれない。

「かわいいそうな奴だな」

「おまえもな」

脳内にしか、彼女いなくて。

澤田は「うらやましいだろ」と、胸を張るが、豊かな腹のほう飛び出していた。

はいはい、と無視して桜井は立体モニターを見た。

番組では、いつもの侵略者ニュースが流れていた。コメントーターが、なんだかロボ研の悪口を言っていた気がするが、桜井は無視してレーシヨンのコンビーフをパンにのせて食べた。

「結果はかわらんな」

その後、脳波をいくら調べても、飯田の操作系との相性はかわらなかった。

困ったものだ。

このままでは、熱血主人公に赤いマフラーをつけてもらい、意気揚々と機体に取り込んでもらおうことができなくなってしまふ。

正規パイロットの席は三つ、ロボの試作は三号機までである。十人全員分作ってしまえといいたところだが、予算が足りぬ。ただでさえ、巨大玩具工場といわれるロボ研なのだから。

一回の演習で八桁の血税が消える、素敵なくらい維持費がかかる。

演習のついでに、爆炎を背景にポスターを作りたかったが、重火器の使用はない。  
意味がないからだ。

侵略者たちにはきかない。

その手の武器は、ここ二十年で試すだけためした。

重火器を使うなら、最初から空爆をしたほうが効率がよいのである。なので武器は、刃物。鉄をバターのように切るナイフを使う。摩擦抵抗を減らした刃を使った超音波ナイフだ。物理攻撃は比較的有効であるというのが、軍の見解のためそういう選択を取ったのだ。もちろん桜井は、身の丈ほどもある剣にしようと提案したら、却下された。

まったくつまらない。

大剣も爆発もロケットパンチもなくて、なにが見ものになるというのだ。

ここ最近、ロボ研の予算が減らされている気がする。ようやく、ロボが形になりはじめたというのに。

表向き、タカ派を気取っている国のお偉いさんがたになにか変化があったというのか。政局なるものが世の中にあるものだが、それによって男の浪漫が潰えるようなら断固抗議しなくてはならない。

世の中、上手くないことだらけである。

桜井の通勤についてだが、研究所のはからいで送迎がついている。桜井は、免許は持っておらず、公共交通機関もあまり通らない研究所なので、言葉に甘えている。早く空間転移装置とか開発されればいいのに。

いつそ寮に住んだほうが早いのだが、祖父の残した端末が実家に置いてあるため通いを選んでいる。

莫大な情報処理能力をもつ量子コンピューターで、実家の地下に保管されている。

国の中枢に入り込むことも可能だと、祖父は悪がきの顔で言っていた。

趣味のプラモだけで、莫大な特許料が消えるわけがなく、ほとんどがこれに消えたといえる。個人で買える代物ではない。

どういう流通を使って買ったのかは知らないが、国内にある量子コンピューターは計五台といわれている。どれも所有しているのは、国や大企業であり、その中に桜井のうちのものは含まれていない。祖父が死んでからは、桜井のみが知ることである。ちなみに祖母は、ただのでかい箱だという認識だ。

桜井が今の地位にいるのも、祖父の恩恵をいまだ受けていることに他ならない。

ああ見えてデリケートなものなので、たまに動かしてやらないとすねるのだ。

「おつかれさまです」

「ああ、ありがとう」

いつものように挨拶をして乗り込むが、普段の運転手とは違った。今日は休みなのだろうか。

「ええ、今日は有給らしくて。かわりに臨時で」

「そうなのか」

車の自動化はとうにできあがった技術なのだが、現行の法律では、免許を持つ人間がいないと操作できないようになってきている。

外を眺めると、やたら元気ないきものがこちらに近づいてきた。

「ハカセ。お帰りですか」

赤いバンダナがとてもよく似合いそうな少年、もとい少女がきた。なにもいわずとも、『ハカセ』と呼んでくれる。うん、『博士』ではなく、『ハカセ』なのだ。

「ああ。帰るところだ。飯田くんは？」

「ええ。一時帰宅つすよ。親父が一度帰れっていうんで」

あいかわらず下手な敬語を使ってくる。発音によっては下っ端臭のする喋り方だが、本人の雰囲気それをさせないのがよい。

MTBを片手で支えている。

ここから街中までけっこう距離はある。

「のつてくか？」

「えっ？いいんですか」

一応聞いてみただけだが、飯田は乗り気のようなうだてつきり、自力で帰るとでもいうと思ったのだが。

いった手前断るわけにもいかない。

怪訝な顔をする運転手にたのみ、飯田を乗せる。

MTBはトランクに入れた。

「じゃあ、住所教えてくれ」

「たぶん、ハカセの家よりずっと先だと思うので、後でいいですよ」

それならば、と桜井の家を先によるように運転手に伝えた。地図が車にインプットされているので、操作パネルを押してもらっただけいい。

なかなか割のいい仕事である。

なので、新入りでも道を間違えることなどないはずなのだが。

なぜだが、見たこともない場所に車はすすんでくれたらしい。ご丁寧に車の窓から見える景色をすり替えてくれたので、降りるまで気が付かなかった。

たとえばいうならば、秘密結社が危ないブツの取引する場所を使うような、港の空き倉庫のような。

周りにはご丁寧に、いかついおにいさんたちがたくさんいる。おのおの、もやし男を脅すには十分すぎる武器を携えていた。指を動かすたびに機械音が響くので、サイボーグがいるのだろう。

「誘拐つてやつですかね？」

「たぶん」

桜井と飯田は、両手をあげて背中合わせになっていた。

飯田にいきなり飛び掛かる短絡思考が搭載されていなかったことを  
意外に感じながら、助かったとおもった。

## 5 地雷

久しぶりの誘拐だ、と桜井は思った。

祖父があまりに有名なため、桜井は幾度となく攫われそうになったのだ。

祖父の死後、残った遺産はほとんど研究機関に寄付することを公にしたため、面倒事は極端に減ったのだが、昔近づいてきた彼女のように、桜井を金づるだと思つう人間はいまだいるのだ。

桜井の孫、それがごく一般的な彼の呼び名だった。

桜井という名は、いまだ自分のものではなく、祖父のことを示しているのだと感じてしまう。

予想通りに桜井は身体を拘束され目隠しされると、何も無い部屋に連れてこられた。窓も家具もない、真っ白な部屋だった。

飯田といえば、なぜか自分を捕まえている男に耳打ちしていた。

なにをしている。

「ちょっとでかけてきます。ハカセ」

男はにやりと笑うと、桜井だけを部屋に残し、飯田を連れてドアの電子ロックを閉める。

桜井は芋虫のように転がったまま、首を傾げたが、なんで飯田だけ連れて行かれたのか理由がひらめくと、ばたばたと身体を動かした。

すっかり忘れていた。

飯田は女性だったわけだ。

帰省することもあって、いつもつけているベストは着用していなかった。

つまりとてもまずい状況なのだ。

暴れすぎて足がつつてからどれくらいたっただろう。

何もない白い空間というのは、変化がなさ過ぎて時間の経過が麻痺してしまう。

開いたドアの音を聞いて、振り返ると、

「おまたせしました」

涼しい顔をした飯田がいた。

倒れている桜井を起こし、手足にかけられた錠を電子キーで開ける。さすが主人公キャラだ。

「俺がヒロインだったら、確実に惚れてるな」

「ハカセ、なんだか失礼なことってますよ」

屈託のない笑みを浮かべる飯田の手には、電子キーの他にスタン警棒を持っていた。さきほどの男から失敬したのだろう。

なんというか、恐ろしい。無駄に張り出した脂肪分は伊達じゃない。そして、それに騙される野郎どもは馬鹿だ、馬鹿としかいいようがない。ああ、元被害者がいうのだから間違いない。

それにしても。

「なんか、慣れてないか？」

「そうすかね。あつ、廊下に出たら、私のあとにぴったりついてください。監視カメラに映るんで」

なんだか、うまくスルーされた気がするが、桜井は飯田に大人しくついていくしかなかった。

妙に手馴れた飯田は、あまりに手際がよすぎて普通の熱血ぶりから想像できなかつた。なんというか、戦隊ものでいえば、レッドというより、ブラックやシルバーといった六人目の戦士的な隠密行動なのだ。ロボオタ桜井はもちろん特撮も、趣味の範囲内である。

「さすがに、あそこ通らなければならぬっすね」

壁に隠れて、向こうでテレビを見ている男たちをみる。

出口はあそこを通らなければいけない。

ここで待っていてください、と飯田に制止され、桜井は黙って壁の後ろから眺める。

「なにを言っている、ここは俺が」

などと、青臭い台詞ははかない。それを言うのは、ヒーローの仕事であり、力なきもやし男は足手まといにならないように見ているほうが賢いのだ。

熱血ヒーローにあこがれるが、それになりたいわけじゃない。なりたくても、なれるものじゃない。

案の定、飯田はひとりで仕事をこなしていく。

気持ちの良いくらい手際の良い作業だ。

隙をついて、一人ノックダウンさせると、次々と片付けていく。

空手とは違う、踵を軸にしているのでムエタイの動きだろうか。器用に拳や蹴りを相手の顎を狙い沈めていく。脳を揺らせば、どんなに肉体改造を施していても脳震盪は防げない。

全員が床に這いつくばったところで、飯田は桜井にこちらに来いとうながす。

「さすがだな」

「そりゃ、筆記でとれない分は、実技で挽回しましたからね」

飯田は散らかったテーブルの上からキーを探すと、ドアのロックを外す。

桜井は、ふとニュースに目がいった。

なにやら、大きな事件が起きているらしい。

「冗談だろ」

映し出されたニュースを見て、桜井は驚きを隠せない。

見慣れた研究所が、煙を上げていた。

録画放送の映像で、発生時刻は桜井と飯田が研究所を出た直後のようである。

「意外と早かったな」

飯田は、クーラーボックスからボトルを取り出すと、口に含んだ。当たり前のようにくつろいでいる。

意味がわからない。

「表向きはこうして、一時、解散させようというところかな」

「まったく意味がわからないんだが」

「政治情勢だよ。世の中、移り変わるもんだ」

下手な敬語さえ使わない。

なにかふっきれたかのような口ぶりだ。

なんだか、おかしい。

そういえば、今日の飯田はなんだかいつもと雰囲気違っていた。

「おかげでもう下手な演技する必要もないか」

飯田は、とがった髪に残ったボトルの水をかける。

硬質の髪がふやけ、落ちてきた分長く見える。

少年らしくみせていたトレードマークが一つ消える。

「まったく、やってらんね」

口が悪い。

元々、敬語は下手だったが、それとは違う。

頬に張っていた絆創膏をはがす。

そこに傷痕はなく、かわりに泣きぼくろがあらわれた。

元々、ガサツな雰囲気は醸し出していたが、それとこれとは少し雰囲気が違う。

少年的な風貌が一変し、蓮っ葉な空気を醸し出す。

生気に満ち溢れた目は気だるげにかわり、屈託のない笑みを浮かべた唇は艶めかしく濡れていた。

少年のように見ていたが、飯田は少年ではない。

よく忘れてしまいが本当のことだ。

呆然とする桜井の前に、飯田は空になったボトルを床に転がす。

後ろには、倒れた男たちがひくついている。ご丁寧ごていねいに両肩の関節を外してくれたようだ。素人の仕事ではない。

「くだらないごっこ遊びに付き合っあってあげたんだから、おとなしくついてきてくんない」

ほんと、恥ずかしかった、あれは、とぼやいている。

「なんのことをいつている？」

「わかんない？ 任務しゅむとはいえ、あんな馬鹿うしかし恥ずかしい演技してやっ

ただけど」

口調に女性らしさは感じられなかったが、元気な少年のような雰囲気は微塵も残っていない。

「とりあえず、おとなしくついてきてくんない」

語尾に疑問符はなかった。

有無を言わせないということか。

「こつちも仕事だし、こうなれば研究所にもどるわけにもいかないっしょ」

いつのまにか壁際に追いやられ、丹田を靴のかかとで踏みつけられている。髪をわしづかみにされている。

なんだこの構図は。

まったく主人公らしくない。

加えて、踏まれている場所が大変居心地が悪い。

「そこはあんまり踏まないでほしいのだが」

「そついわれると、踏みたくなるな」

天邪鬼なことをいい、艶めかしく笑う。

熱血主人公ヒーローというより、敵の女幹部というのがふさわしい。もしくは、女スパイというところか。もしくはかなりサディスティックな対応である。

どつやら、桜井は人生二度目の地雷を踏んでいたらしい。

## 6 目的

「ひとつ質問していいか」

「なんだ？」

車を手動に切り替えて、飯田が運転している。けだるげな雰囲気は、あのはきはきした熱血少女とは思えず、どちらかといえば見た目よりも老けて見えた。

「君の話を要約すると、俺の監視と護衛のために、研究所に入り込んだんだよな」

「まあ、そうだな」

ならばなぜ。

「なんで、拘束されてるんだ？」

先ほどと同じく、両手両足ふさがれて芋虫のように後部座席に転がっている。まだ、目が自由なだけ先ほどよりましかもしれない。と、いつても転がされて外の景色など見えないが。

「逃げられると面倒」

至極簡潔に答えてくれた。

こうして、けっこうな時間、不安定な状態で転がったままで。

連れてこられた場所は、豪華な部屋だった。駐車場と直通になっていることから、高級マンションの類だろう。

「はい、ハカセ。ちょっと待っててね」

と、飯田は服を脱ぎ始めてそのままシャワーに向かった。

「恥じらいを持たんか」

「そりゃそうだわな」

後ろから、同意の音がする。

桜井は身をよじる。

ランニングを着た小汚い中年男が、興味深そうに桜井を見ている。ペンの先で桜井をつつく。

「へえ、あんたが桜井博士の孫ですかい」

「一応、俺も桜井ハカセなんですけどね」

と、転がった桜井を起こし、拘束された手足を解放する。

「ども」

「いやいや、うちの嬢ちゃんは荒っぽいからね」

「で、あんたは誰ですか」

「これは失礼」

俺は金山というものです、と。

某大手民間警備会社の名前が入っていた。

「おう、長風呂だな」

「なにやってんの」

「親睦深めてんの」

飯田がホットパンツにタンクトップと、とてもはしたない恰好で  
てきた。

床に酒瓶と缶を転がしている。桜井はビールを、金山は日本酒を飲  
んでいた。

一応、形だけと、片手だけは手錠をかけられ、柱につながれている。

「妙に図太いな」

「誘拐慣れしてるもんでな」

どうでもいい自慢である。

正直、酒を飲まなければやっていけないだろう。

爆破事件の詳細は、ニュースと金山という男から詳細を聞いた。

とくに重傷者もおらず、被害は器物だけで終わっている。

まあ、あの助手と中年男のことだから心配する必要ないだろう。

研究室には、今までの資料と試作として作った操作装置があったわ  
けだが、バックアップは実家に帰るたびにとってあるので問題ない。  
三日分の資料など大したことない。

ただ、心配なのは、今後研究が続けられるかということだった。飯田は、政局の変化だといってくれた。

薄汚い中年に理由を聞くと、飯田に直接聞けといわれた。

「一体、どうということなんだ」

「それは、私がハカセの護衛になる経緯からはじまるけど」

桜井を独占する、もとい護衛する目的は、彼の祖父が残した桜井システムが大きく関わっている。

孫という立場もあって、謎の多い桜井システムの第一人者は祖父亡き後、桜井となっている。

侵略者が知的生命体なのか、それは降り立った当初から話題になっていたことだった。

巨大な化け物たちは、まるで甲虫の卵のような形のものもあれば、木の実のようなもの、または動物を模したモニュメントに似た形のものもあった。

兵器なのか、生物なのか。

それが生物ではないかと言われるようになったのは、偶然、侵略者の電気活動を読み取ったことから始まる。脳波を読み取るゴーグルが、つけてもいないのに微かな反応を示していたのだ。

他の地域に比べ、樹海にある日本の侵略者は、そこにたどり着くまでに障害物が多いため、軍がより近づいてデータを取る傾向にある。偶然とはいえ、平和ボケした国が今まで手をこまねいていた侵略者に報いる鍵を手に入れたのだ。

桜井システムに反応したということは、人間と同じく思考があるのかもしれない。

もし、あるとすれば、対話の可能性もできるかもしれない。

そこで必要になるのは、桜井システムのもう一つの側面、世界中の人間の脳波を集めた膨大な情報量である。

十八体分の侵略者の電気信号と、のべ百億人をこえる人間の脳波を比べたら、なにかわかるのではないかと。

藁をもすがる気分なのだろう。

と、いうわけで、民間警備会社から派遣された飯田が研究所に入っただけだ。今の時代、警察よりも警備会社のほうが補償もきき、重宝されている。

ご丁寧に、桜井好みの理想の熱血主人公に擬態してくれた。

「どうせなら、ちゃんとした少年はいなかったのか」

「まさか、私になるとは思わねえよ」

ものすごく疲れた目をされた。

ああ、あの活きの良い熱血主人公の目はどこへいったのだろう。

「まさか、他のやつらが全員落ちるとは思わないからね」

金山は温めたピザを持ってきていった。

桜井は、ピーマンののっていない一片をもらう。

「誰だよ、テストに歴代勇者シリーズの主人公の名前を書けっただしたのは」

「それは、俺だ」

飯田が射殺さんばかりの目線で睨み付けてくる。  
こわいので目をそらす。

「じゃあ、使徒の名前を五つ以上書けっつのは？」

「それは、澤田だな」

「うるち米品種ひとめぼれの両親を答えろっつのは」

「ああ。たしか、外装担当のやつだな。実家がコメ農家らしい。仲良くするとお歳暮に新米が届くぞ」

呆れを通り越して、疲れた顔をする誘拐犯もとい民間警備会社勤務のふたりである。

「変人研究所っつてのは本当だな」

「失礼な」

ところで、そんなテストをクリアした飯田だが、少なくともそんなマニアックな問題を八割以上正答できたということになる。

それをつっこみたくなつたが、今度はヒールのとがった靴で踏みつけられそうなので、やめておいた。

桜井はぼさぼさの頭をかきむしる。眼鏡をとり、レンズをティッシュで拭く。

「つまり、俺がその翻訳とやらを試せば、とりあえず問題ないわけだ」

「なんだか、察しが良すぎて不気味だな」

「失敬な」

実は、熱血少年時の飯田を録画して、特撮ものの冒頭風に編集して

いたりしたが、そのうち嫌がらせに使おうかと、悪いことが頭によぎった。

「それくらいで、終わるくらいならさっさと終わらせような」

桜井は、つながれた左手をあげた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3227z/>

---

ロボット製作者の誤算

2011年12月18日03時03分発行